凱旋祭

泉鏡花

一

紫の幕、紅（くれない）の旗、空の色の青く晴れたる、草木の色の緑なる、唯（ただ）うつくしきものの弥（いや）が上に重なり合ひ、打混（うちこん）じて、譬（たと）へば大（おおい）なる幻燈（うつしえ）の花輪車（かりんしゃ）の輪を造りて、烈（はげ）しく舞出で、舞込むが見え候のみ。何をか緒（いとぐち）として順序よく申上げ候べき。全市街はその日朝まだきより、七色を以て彩られ候と申すより他はこれなく候。

紀元千八百九十五年―月―日の凱旋祭（がいせんまつり）は、小生が覚えたる観世物（みせもの）の中（うち）に最も偉（おおい）なるものに候ひき。

知事の君をはじめとして、県下に有数なる顕官、文

官武官の数を尽し、有志の紳商、在野の紳士など、尽く銀山閣といふ倶楽部組織の館に会して、凡そ半月あまり趣向を凝されたるものに候よし。

先づ巽公園内にござ候記念碑の銅像を以て祭の中心といたし、ここを式場にあて候。

この銅像は丈一丈六尺と申すことにて、台石は二間に余り候はむ、兀如として喬木の梢に立ちをり候。右手に提げたる百錬鉄の剣は霜を浴び、月に映じて、年紀古れども錆色見えず、仰ぐに日の光も寒く輝き候。

銅像の頭より八方に綱を曳きて、数千の鬼灯提灯を繋ぎ懸け候が、これをこそ趣向と申せ。一ツ一ツ皆

真蒼に彩り候。提灯の表には、眉を描き、鼻を描き、眼を描き、口を描きて、人の顔になぞらへ候。

さて目も、口も、鼻も、眉も、一様普通のものにてはこれなく、いづれも、ゆがみ、ひそみ、まがり、うねりなど仕り、なかには念入にて、酔狂にも、真赤な舌を吐かせたるが見え候。皆切取つたる敵兵の首の形にて候よし。さればその色の蒼きは死相をあらはしたるものに候はむか。下の台は、切口なればとて赤く塗り候。上の台は、尋常に黒くいたし、辮髪とか申すことにて、一々蕨縄にてぶらぶらと釣りさげ候。一ツは仰向き、一ツは俯向き、横になるもあれば、縦に

なりたるもありて、風の吹くたびに動き候よ。

二

　催(もよおし)のかかることは、ただ九牛(きゅうぎゅう)の一毛(いちもう)に過ぎず候。凱旋門(がいせんもん)は申すまでもなく、一廓(いっかく)数百金を以て建られ候。あたかも記念碑の正面にむかひあひたるが見え候。またその傍(かたわら)に、これこそ見物(みもの)に候へ。ここに三抱(みかかえ)に余る山桜の遠山桜とて有名なるがござ候。その梢より根に至るまで、枝も、葉も、幹も、すべて青き色の毛布にて蔽(おお)ひ包みて、見上ぐるばかり巨大なる象の形に

拵(こしら)へ候。

毛布はすべて旅団の兵員が、遠征の際に用ゐたるをつかひ候よし。その数八千七百枚と承り候。長蛇(ちょうだ)の如き巨象の鼻は、西の方にさしたる枝なりに二蜿(ふたうね)り蜿りて喞筒(ポンプ)を見るやう、空高き梢より樹下を流るる小川に臨みて、いま水を吸ふ処に候。脚(あし)は太く、折から一員の騎兵の通り合せ候が、兜形(かぶとがた)の軍帽の頂(いただき)より、爪(つめ)の裏まで、全体唯その前脚(まえあし)の後(うしろ)にかくれて、纔(わずか)に駒(こま)の尾のさきのみ、此方(こなた)より見え申し候。かばかりなる巨象の横腹をば、真四角(まっしかく)に切り開きて、板を渡し、ここのみ赤き氈(せん)を敷詰めて、踊子が舞の舞台にいたし候。

葉桜の深翠（ふかみどり）したたるばかりの頃に候へば、舞台の上下にいや繁（しげ）りに繁りたる桜の葉の洩（も）れ出（い）で候て、舞台は薄暗く、緋（ひ）の毛氈の色も黒ずみて、もののしめやかなるなかに、隣国を隔（へだ）てたる連山の巓（いただき）遠く二ツばかり眉を描きて見渡され候。遠山桜あるあたりは、公園の中（うち）にても、眺望（ちょうぼう）の勝景（しょうけい）第一と呼ばれたる処に候へば、式の如（かた）き巨大なる怪獣の腹の下、脚（あし）の四（よ）ツある間を透（すか）して、城の櫓（やぐら）見え、森も見え、橋も見え、日傘（ひがさ）さして橋の上渡り来るうつくしき女の藤色の衣（きぬ）の色、あたかも藤の花一片（ひとひら）、一片の藤の花、いといと小さく、ちらちら眺められ候ひき。

こは月のはじめより造りかけて、凱旋祭の前一日の昼すぎまでに出来上り候を、一度見たる時のことに有之（これあり）候。

夜に入ればこの巨象の両個の眼（まなこ）に電燈を灯（ひとも）し候。折から曇天（どんてん）に候ひし。一体に樹立（こだち）深く、柳松など生茂（おいしげ）りて、くらきなかに、その蒼白なる光を洩（もら）し、巨象の形は小山の如く、喬木の梢を籠（こ）めて、雲低き天に接し、朦朧（もうろう）として、公園の一方にあらはれ候時こそ怪獣は物凄（ものすさ）まじきその本色（ほんしょく）を顕（あらわ）し、雄大なる趣を備へてわれわれの眼には映じたれ。白昼はヤハリ唯毛布を以て包みなしたる山桜の妖精に他ならず候ひし。雲はいよ

いよ重く、夜はますます闇（くら）くなり候まま、炬（きょ）の如き一双（いっそう）の眼、暗夜に水銀の光を放ちて、この北の方（かた）三十間、小川の流（ながれ）一たび灌（そそ）ぎて、池となり候池のなかばに、五条の噴水、青竜の口よりほとばしり、なかぞらのやみをこぼれて篠（しの）つくばかり降りかかる吹上げの水を照し、相対（あいたい）して、またさきに申上候銅像の右手（めて）に提（ひっさ）げたる百錬鉄の剣に反映して、次第に黒くなりまさる漆（うるし）の如き公園の樹立（こだち）の間（なか）に言ふべからざる森厳（しんげん）の趣を呈し候、いまにも雨降り候やうなれば、人さきに立帰り申候。

三

あくれば凱旋祭の当日、人々が案じに案じたる天候は意外にもおだやかに、東雲（しののめ）より密雲破れて日光を洩（もら）し候が、午前に到りて晴れ、昼少しすぐるより天晴（あっぱれ）なる快晴となり澄（すま）し候。

　さればこそ前（ぜん）申上げ候通り、ただうつくしく賑（にぎや）かに候ひし、全市の光景、何より申上げ候はむ。ここに繰返してまた単に一幅（いっぷく）わが県全市の図は、七色を以てなどりて彩られ候やうなるおもひの、筆執（と）ればこの紙面（しめん）にも浮びてありありと見え候。いかに貴下、さや

うに候はずや。黄なる、紫なる、紅なる、いろいろの旗天を蔽ひて大鳥の群れたる如き、旗の透間の空青き、樹々の葉の翠なる、路を行く人の髪の黒き、簪の白き、手絡の緋なる、帯の錦、袖の綾、薔薇の香、伽羅の薫の薫ずるなかに、この身体一ツはさまれて、歩行くにあらず立停るといふにもあらで、押され押され市中をいきつくたびに一歩づつ式場近く進み候。横の町も、縦の町も、角も、辻も、山下も、坂の上も、隣の小路もただ人のけはひの轟々とばかり遠波の寄するかと、ひツそりしたるなかに、あるひは高く、あるひは低く、遠くなり、近くなりて、耳底に響き候のみ。

裾の埃、歩の砂に、両側の二階家の欄干に、果しなくひろげかけたる紅の毛氈も白くなりて、仰げば打重なる見物の男女が顔も朧げなる、中空にはむらむらと何にか候らむ、陽炎の如きもの立ち迷ひ候。

万丈の塵の中に人の家の屋根より高き処々、中空に斑々として目覚しき牡丹の花の翻りて見え候。こは大なる母衣の上に書いたるにて、片端には彫刻したる獅子の頭を縫ひつけ、片端には糸を束ねてふつさりと揃へたるを結び着け候。この尾と、その頭と、及び件の牡丹の花描いたる母衣とを以て一頭の獅子にあひなり候。胴中には青竹を破りて曲げて環にしたるを

幾処(いくところ)にか入れて、竹の両はしには屈竟(くっきょう)の壮佼(わかもの)ゐて、支へて、膨(ふく)らかに幌(ほろ)をあげをり候。頭(かしら)に一人の手して、力逞(たく)ましきが猪首(いくび)にかかげ持ちて、朱盆の如き口を張り、またふさぎなどして威を示し候都度(つど)、仕掛を以てカツカツと金色(こんじき)の牙(きば)の鳴るが聞え候。尾のつけもとは、ここにも竹の棹(さお)つけて支へながら、人の軒より高く突上げ、鷹揚(おうよう)に右左に振り動かし申候。何貫目やらむ尾にせる糸をば、真紅の色に染(そ)めたれば、紅の細き滝支ふる雲なき中空より逆(さかさ)におちて風に揺(ゆ)らるる趣(おもむき)見え、要するに空間に描きたる獣王の、花々しき牡丹の花衣(はなぎぬ)着けながら躍(おど)り狂ふにことならず、目覚しき獅子

の皮の、かかる牡丹の母衣の中に、三味（さみ）、胡弓（こきゅう）、笛、太鼓、鼓（つづみ）を備へて、節をかしく、かつ行き、かつ鳴して一ゆるぎしては式場さして近づき候。母衣の裾（すそ）よりうつくしき衣（きぬ）の裾、ちひさき女の足などこぼれ出でて見え候は、歌姫（うたひめ）の上手（じょうず）をばつどへ入れて、この楽器を司（つかさど）らせたるものに候へばなり。

おなじ仕組の同じ獅子の、唯一（ただひと）つには留まらで、主立（おもだ）つたる町々より一つづつ、すべて十五、六頭邌（ね）り出（い）だし候が、群集（ぐんじゅ）のなかを処々横断し、点綴（てんてつ）して、白き地に牡丹の花、人を蔽（おお）ひて見え候。

四

群集ばらばらと一斉（いっせい）に左右に分れ候。
不意なれば蹌踉（よろ）めきながら、おされて、人の軒に仰ぎ依りつつ、何事ぞと存じ候に、黒き、長き物ずるずると来て、町の中央（なか）を一文字に貫きながら矢の如く駈（か）け抜け候。
これをば心付き候時は、ハヤその物体の頭（かしら）は二、三十間（けん）わが眼の前を走り去り候て、いまはその胴中（どうなか）あたり連（しき）りに進行いたしをり候が、あたかも凧（たこ）の糸を繰出す如く、走馬燈籠（まわりどうろう）の間断なきやう俄（にわか）に果つべくも見

え申さず。唯人の頭も、顔も、黒く塗りて、肩より胸、背、下腹のあたりまで、墨もていやが上に濃く塗りこくり、赤褌着けたる臀、脛、足、踵、これをば朱を以て真赤に色染めたるおなじ扮装の壮佼たち、幾百人か。一人行く前の人の後へ後へと繋ぎあひ候が、繰出す如くずんずんと行き候。およそ半時間は連続いたし候ひしならむ、やがて最後の一人の、身体黒く足赤きが眼前をよぎり候あと、またひらひらと群集左右より寄せ合うて、両側に別れたる路を塞ぎ候時、その過行きし方を打眺め候へば、彼の怪物の全体は、遥なる向の坂をいま蜿り蜿りのぼり候首尾の全きを、い

かにも蜈蚣（むかで）と見受候。あれはと見る間に百尺（ひやくせき）波状の黒線（こくせん）の左右より、二条の砂煙（さえん）真白（ましろ）にぱツと立つたれば、その尾のあたりは埃（ほこり）にかくれて、躍然（やくぜん）として擡（もた）げたるその臼（うす）の如き頭（こうべ）のみ坂の上り尽くる処雲の如き大銀杏（おおいちょう）の梢（こずえ）とならびて、見るがうちに、またただ七色の道路のみ、獅子の背のみ眺（なが）められて、蜈蚣（むかで）は眼界を去り候。疾（と）く既に式場に着し候ひけむ、風聞（うわさ）によれば、市内各処における労働者、たとへばぼてふり、車夫、日傭取（ひようとり）などいふものの総人数をあげたる、意匠の俄（パフナリー）に候とよ。

彼（か）の巨象と、幾頭の獅子と、この蜈蚣と、この群集

とが遂(つい)に皆式場に会したることをおん含(ふくみ)の上、静にお考へあひなり候はば、いかなる御感(おんかん)じか御胸(おんむね)に浮び候や。

五

別に凱旋門(がいせんもん)と、生首提灯(なまくびじょうちん)と小生は申し候。人の目鼻書きて、青く塗りて、血の色染めて、黒き蕨縄(わらびなわ)着けたる提灯と、竜の口なる五条の噴水と、銅像と、この他に今も眼に染(し)み、脳に印して覚え候は、式場なる公園の片隅に、人を避けて悄然(しょうぜん)と立ちて、淋(さび)しげにあた

りを見まはしをられ候、一個(ひとり)年若き佳人にござ候。何といふいはれもあらで、薄紫のかはりたる、藤色の衣(きぬ)着けられ候ひき。

　このたび戦死したる少尉Ｂ氏の令閨(れいけい)に候。また小生知人にござ候。

　あらゆる人の嬉しげに、楽しげに、をかしげに顔色の見え候に、小生はさて置きて夫人のみあはれに悄(しお)れて見え候は、人いきりにやのぼせたまひしと案じられ、近う寄り声をかけて、もの問はむと存じ候折から、おツといふ声、人なだれを打つて立騒ぎ、悲鳴をあげて逃げ惑ふ女たちは、水車の歯にかかりて撥(は)ね飛ばされ

候やう、倒れては遁（に）げ、転びては遁げ、うづまいて来る大蜈蚣（むかで）のぐるぐると巻き込むる環のなかをこぼれ出で候が、令閨（れいけい）とおよび五三人はその中心になりて、十重二十重（とえはたえ）に巻きこまれ、遁（のが）るる隙（ひま）なく伏（ふし）まろび候ひし。警官駈（か）けつけて後（のち）、他は皆無事に起上り候に、うつくしき人のみは、そのまま裳（もすそ）をまげて、起たず横はり候。塵埃（ちりほこり）のそのつややかなる黒髪を汚（けが）す間もなく、衣紋（えもん）の乱るるまもなくて、かうはなりはてられ候ひき。

むかでは、これがために寸断され、此処（ここ）に六尺、彼処（かしこ）に二尺、三尺、五尺、七尺、一尺、五寸になり、一分になり、寸々（ずたずた）に切り刻まれ候が、身体（からだ）の黒き、足

の赤き、切れめ切れめに酒気を帯びて、一つづつうごめくを見申し候。

日暮れて式場なるは申すまでもなく、十万の家軒ごとに、おなじ生首提灯の、しかも丈（たけ）三尺ばかりなるを揃うて一斉（いっせい）に灯（ひとも）し候へば、市内の隈々塵塚（くまぐまちりづか）の片隅まででも、真蒼（まっさお）き昼とあひなり候。白く染め抜いたる、目、口、鼻など、大路小路の地（つち）の上に影を宿して、青き灯（ひ）のなかにたとへば蝶の舞ふ如く蠟燭（ろうそく）のまたたくにつれて、ふはふはとその幻（まぼろし）の浮いてあるき候ひし。ひとり、唯、単に、一宇（いちう）の門のみ、生首に灯（ひとも）さで、淋（さび）しく暗かりしを、怪しといふ者候ひしが、さる人は皆人の

心も、ことのやうをも知らざるにて候。その夜更(ふ)けて後、俄然(がぜん)として暴風起り、須臾(しゅゆ)のまに大方の提灯を吹き飛ばし、残らず灯(ひ)きえて真闇(まっくら)になり申し候。闇夜(やみよ)のなかに、唯一ツ凄(すさ)まじき音聞え候は、大木の吹折られたるに候よし。さることのくはしくは申上げず候。唯今風の音聞え候。何につけてもおなつかしく候。

月　日

ぢい様

底本：「外科室・海城発電　他五篇」岩波文庫、岩波書店
　　1991（平成3）年9月17日第1刷発行
　　2000（平成12）年9月5日第18刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第三巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年12月25日第1刷発行
初出：「新小説」第二年第六巻
　　1897（明治30）年5月
※「読みにくい語、読み誤りやすい語には現代仮名づかいで振り仮名を付す。」との底本の編集方針にそい、ルビの拗促音は小書きしました。

入力：門田裕志
校正：鈴木厚司
２００３年８月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。